神奈川県現代俳句協会会報

第159号

令和5年3月発行

神奈川県現代俳句協会創立四十周年記念大会

令和四年十一月二十三日
於・ワークピア横浜

講演「新興俳句からのメッセージ」

現代俳句協会会長　中村　和弘　先生

ただいまご紹介いただきました、現代俳句協会の中村和弘と申します。昨日までは大変天気がよくて、このまま続くかと思いましたが、急にがたっと雨が降りまして。これは私の行いが悪いのだろうかと、今日は皆さん来てくれるのだろうかと心配しましたが、なんとなんと、こんなにたくさんの方が聞きに来てくれて、大変ありがたいと思います。中には、表彰されにきたのだという方もおられるかもしれませんけれども、（笑）まあ我慢して聞いてやろうということでお願いします。

ただいまご紹介いただきましたが、自分の経歴というのは何となく恥ずかしいものですね。別に悪いことしてるわけじゃないし、犯罪歴は確か一つもないはずですけれど、客観的に言われますと何となく気恥ずかしい感じであります。私の先生は田川飛旅子という先生で、理科系の珍しい作家でありました。加藤楸邨先生を大変尊敬していて。とにかく天下で加藤楸邨先生以外は僕は信用しないというぐらいに、楸邨を尊敬していること人後に落ちないというぐらいの先生でした。その田川飛旅子が、私が俳句を始めて一年ぐらいしたころ、僕は25歳ぐらいに俳句を始めたんですけれども、大変いい先生がいるから君を紹介するからぜひ出ろと半分無理やり、そして紹介していただいたのが加藤楸邨先生。大変ありがたいことだったなと、今になって思ったりもいたします。

中村和弘会長

今日お話ししたいことは「新興俳句からのメッセージ」ということ。これも田川飛旅子という先生は不思議な方でありまして、楸邨に学びながら、新興俳句もかなり勉強してました。こういう作家がいる、ああいう作家がいると、「君なんか若いんだから、領域を広く勉強しなさいよ」と、当時西東三鬼だとか、富沢赤黄男だとか、そういう人の句集をどんどん押し付けてくるんですね。読まざるを得なくて、困ったな、忙しくて読んでる暇ないなと思いながらも読んだら、これが大変面白いんですね。そういうことで新興俳句に興味を持ちました。そんなスタートがあると同時に、現代俳句協会のおおもとはやっぱり新興俳句なんですね。皆さんの師系を遡ると、だいたい新興俳句。そうでない伝統派の方ももちろん入っておられますけれども、新興俳句の系譜の方が大変多いのではないか。

そして、その師系につながる方々がいま大変、俳壇でいい仕事をされています。そして、その師系をたどりますと新興俳句と、言い切っても過言ではないと思います。そんなことで、今日このタイトルにいたしました。

そして新興俳句を、歴史的に位置付けていただいた川名大さんは、さきほどちらっと顔をお見掛けしたように思うんですけれども、神奈川にお住まいです。今年の現代俳句大賞を受賞されました。授賞式で九州まで行きまして、川名さんとじっくり話したのは、大変うれしく思いました。

歴史的なことは、僕は研究者でないものですから、今日は俳句の作品の内容を、なぜ新興俳句なのか、お話したいと思います。今日のレジュメに私が選んだ新興俳句の三人は、私にとっては新興俳句らしい。新興俳句というのはもっと広いんですけれども、その中でも私の青春時代に心を湧き立たせてくれた詩性、ポエジーをもっている作家です。私の頭の中では、数ある新興俳句のメンバーのなかでももっとも新興俳句らしいと、私のかなり独断的ではありますけれども、そう感じた作家です。それともうひとつ、今から百年前に起こったのが第一次世界大戦、そして、スペイン風邪の流行で、戦争のためにさらに流行が促進されてしまったということであります。不思議なもので、百年後にまた今我々がコロナで苦しみ、そして戦争も始まった。ロシアの侵攻によって世界中が巻き込まれているという状態になっていますね。ある意味では社会情勢もちょっと似てきているかということもあります。それがどういう風に影響してきているかというと、詩のなかに社会に対す

トピックス

創立四十周年記念大会　講演録
全句講評講座報告
諸家近詠
俳人交遊録
サミット短信
新しい風
春の一句

る抗議だとか批評がありますね。思い出したのは、多分神奈川新聞だったと思いますが、与謝野晶子がスペイン風邪の流行は政府が悪いんだ、政府の後手後手になっているのがけしからんと、抗議した記事が出たのを思い出しましたので付け加えておきます。

さて一九〇〇年代、この時期というのは非常に大事な時期であります。新興俳句が起こった、まずそのことから話していきます。昭和六年に水原秋櫻子が「ホトトギス」の写生一辺倒、花鳥諷詠を批判して、「自然の真と文芸上の真」という論文を書き、「ホトトギス」を離脱したというところから、俳壇の構成ががらりと変わってきたということです。川名さんが歴史的にここを押さえて、新興俳句の初期、スタート段階と、この新興俳句を一期二期三期と分けて詳しく書いておられます。水原秋櫻子に続いて山口誓子が「ホトトギス」を離脱し、その後中村草田男たちも「ホトトギス」を離れたということがあります。また、「ホトトギス」から離れたのではなくて、最初から別の作り方をしていた人たちもおりました。それが富沢赤黄男、渡辺白泉、西東三鬼等の、現代詩に近いところで活躍していたグループでした。高屋窓秋さん、僕は大好きなんですが、高屋さんが「ホトトギス」にも一時投句していた。けれども「ホトトギス」を離れて、こういう作品を作るようになりました。

石の上にごろんごつんと冬が来て　高屋窓秋

こんな句は、「ホトトギス」では絶対取られないだろうと思いますね。どうしてこういう作風が、新興俳句の富沢赤黄男だとか高屋窓秋、西東三鬼、渡辺白泉のような作品が生まれてきたのか。自然発生的に生まれてきたのかというと必ずしもそうではなくて、これは期を一にしてというよりは、一九〇〇年代に、ヨーロッパで詩の改革が起こったんですね。「シュルレアリスム」とか、「ネオリアリズム」とか言われておりますけれども。日本に優れた現代詩の翻訳家が当時おりました。堀口大学をはじめ西脇順三郎さん、こういう方が積極的にこれを日本に紹介した。その結果として当時の文学青年は現代詩をよく読んでおりました。俳人もそうです。横断的な付き合いが非常に盛んだったんですね。今のように現代詩は現代詩、短歌は短歌、俳句は俳句で分かれているのではなくて。正岡子規は両方やっていたのは皆さんご存じだと思います。夏目漱石なんかを含めて、ごちゃごちゃと、詩人も小説家もまじりあって知り合って、新しい文学的方法を探りながら、日本が盛り上がっていたわけですね。ヨーロッパでシュルレアリスムやネオリアリズムという運動が起こり、日本でよく読まれたのはアポリネールじゃないかなと思います。アポリネールだけじゃなくて、ブルトン、アラゴン、エデュアールだとか。多分、詩人よりも画家の方が皆さん親しんでいるのではないかなと思います。例えば、ピカソ、ルソー。アポリネールよりも、マリー・ローランサン、ああそんな絵を見に行きましたという方が相当いるのではないかと思いますね。マリー・ローランサンを見て好きだという方、ちょっと手を挙げていただいて。このなかでこれだけのかなりの人がマリー・ローランサンを好きだと。アポリネールを名前ぐらいは知っているけれどあまり読んだことはない人が、画家は知っている。マリー・ローランサンも、ネオリアリズム、シュルレアリスムなんです。それから、ミロ、ダリといったらわかるでしょう。ブルトンだとかアラゴンだとかエデュアールと私言いましたが、さてさて、そこまで読んでいる青年はそう多くはなかったろうと思いますね。このグループの人たちは、パリのサロンでお互いに画家も詩人も、小説家も集まり、そこでいろいろ刺激しあって、自分たちの自由のなかで社会批評を含めた作品を作っていった。ミロだとか、ダリも、日本で展示会等があると上野だと一時間ぐらい待たないと見られないぐらいの人気です。外国の人が見るとびっくりするんじゃないかというぐらい。富沢赤黄男にしても高屋窓秋にしても渡辺白泉にしても、青春時代をそういう詩を読んだ。それらの媒介役でもあり、直接の影響者である現代詩の詩人が、特に、北川冬彦、安西冬衛、竹中郁、北園克衛、もっとも重要なキーワードが西脇順三郎ですね。西脇さんがどんどん翻訳して紹介し、北川さんもフランス文学を原書で読んで、例えばアポリネールを始めとして、ルイ・アラゴンなんかもよく勉強していたと思います。

ちょっと現代詩の紹介をしてみます。当時短詩が非常に流行った。もちろんアポリネールだって短い詩ばかり作っていたわけじゃない。長詩もあります。日本の詩人も長い詩も作っていると思いますが、特徴があるのは非常に短い詩、うんと短い詩を作る。そういう詩はそれまではあまりなかったんですね。数行の詩はありましたが、一行二行の詩はあまりなかったと思います、私が知る限り。たとえば北川冬彦の短詩、ご存じの方もあると思います。

馬

軍港を内蔵している

海

さびしい街の洋館のガラスがみんな破れていた。

ラッシュアワア

改札口で／指が　切符と一緒に切られた

長城の一匹の蠅は可憐である

目に滲みる世界の黒い汗

爪

石の上の掻跡

「爪」、これちょっと恐ろしい光景を暗示しているように思えますね。何の爪跡かはわからないけれど、ある暗示。ホロコーストのガス室で、壁に人間が爪をたてたあとが写真などで撮られていますけれど、そんなことも思いださないわけではない。

アポリネール（一八八〇年～一九一八年）の短詩を挙げました。これらはアポリネールの作ったのと同じスタイルを継いでいるわけです。例えば猫、象、毛虫だとか、ぱっとテーマを出しておいて。そうでしょう、北川冬彦の「馬」、安西冬衛の「春」、竹中郁の「雪」なんていうのは、出し方が類似している。これは明らかに、アポリネールを読んだ影響が出て

いようかなと思います。アポリネールで難しいのは、キリスト教が出てくると日本人にはちょっとわかりにくい、難解な作品もあります。ただ、ここに出したのは動物だとか、わりとわかりやすい。皆さんは短詩型で、俳句で長年鍛えているから、詩の短いのでもかなり理解度が高いと思います。

猫

僕は持ちたい家のなかに
理解のある細君と本のあいだを歩きまわる猫と
それなしにはどの季節にも
生きてゆけない友だちと

象

象に牙があるように
僕も口中に尊い宝を持つている
人は知らぬが！・・・僕は自分の光栄を
妙な言葉の値で買う

毛虫

働くことは金持ちをつくる
貧乏な詩人よ　働こう！
毛虫は休みなく苦労して
豊麗な蝶になる

蚤

蚤も友人も恋人も
どれも　僕らを愛するものは残酷だ
僕らは血をすべて彼らに吸われる
ああ　愛されるのは禍いだ

鯉

君らの生洲の中で君らの池の中で
鯉よ　君らはなんと長命だ！
死が君らを忘れるのか
憂鬱の魚よ

孔雀

ひきずるほども長いから
尾羽根を車輪にひろげると
この鳥　むしょうに美しい
もつともお尻はまるだしです

皆さん直感的に、おわかりになるかなと。意味はわからなくても、訴えてくるものを感じるセンサー、このへんにセンサーが付いていて、だんだん角みたいに発達してきて、それでキャッチして、意味はわからなくたっていいと思う。ああ、同感するなと、なんだかそんな感じがする。それが本来、先に言っちゃったけれども、新興俳句です。俳句の初心者が必ず私にいうことは、「この句の意味がわからない」という常套文句で。意味を教えてください、解釈してくださいと言われる。だけどもベテランの方はそんなこと言わないでしょう。理屈では丁寧に言えないけれど、なんとなくわかる。それが僕は詩の基本じゃないかと思います。ヨーロッパ的に言うと「アンビギュイティ」、詩における曖昧性というのは大変大事。意味が通っているのほど通俗的に落ちる可能性があるということも言えましょうかね。そんなことで僕は、アポリネールの作品わりと好きなものだから、ここに短いのだけ紹介しました。

アポリネールが短い詩を多発している、その影響が日本の詩人にも及んだ。そして俳壇にも影響を与えて、作る内容、テーマが変わってきた。逆にいうと、日本の俳句が影響を与えたということも言えなくない。西脇順三郎は俳句を、古典をとても勉強されていて、その紹介をヨーロッパにどんどんしているわけです。俳句の間のとりかた、季語、こういうものを含めて、かなり紹介しておりますね。ですから相関関係にあるといってよいのではないかなと思います。アポリネールというとなんとなく難しい気がしますけれど、そんなことまったくなくて。読みつけてしまうとようわかる。読みつけないとよくわからない。なんだってそうだよね。俳句だって最初は難しい。僕なんかの頃だって、最初同じ結社でもわからないのがいっぱいあるわけですから。その話は時間が足りないのでやめておきます。

こんなアポリネールの詩が、日本の詩壇に影響しないわけがない。先ほど北川冬彦の詩を三つ挙げましたが、安西冬衛の詩です。

春

てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った

春

鰊が地下鉄道をくぐつて食卓に運ばれてくる

それから北園克衛です。

少年たちは石のやうに固い頭に汗を出す

次は西脇順三郎の有名な、初期の作品です。

覆された宝石のやうな朝
何人か戸口にて誰かとさゝやく
それは神の生誕の日

それぞれ想像してみればいい。この「覆された宝石のやうな朝」、ここが、新しい。内観というんでしょうかね。詩を組み立てた、そのことが私は尊いなと思います。それが、新興俳句にどう影響してきているかということですね。僕は、皆さんがからようわからないわからないと訊かれることがあるんですけれども、富沢赤黄男のこれはよくわかりますよね。

陽だまりにをれば内閣倒れけり

次はよく訊かれる句です。

影はただ白き鹹湖(かんこ)の候鳥(わたりどり)

意味がようわからんと。あんただったらわかるだろう、ちゃんと解釈して意味を教えてくれと言われることがあったりしまして。難しい句ではちっともないなと思います。鹹湖（かんこ）というのは、塩の湖のこと。昨今テレビであちこちの自然遺産だとかやっておりますね。そのなかでウユニ塩湖というのを皆さん見たことあるでしょう。一面に鏡のような水面が広がっている、昔は海底だったところですね。ほとんどの山は昔海の底にあった。ヒマラヤも例外ではない。ヒマラヤ山脈の頂上近くに行くと貝の化石がある。僕も買って帰りました。貝の化石、磨きますときれいですよ。その「白い塩湖」と言ったのでは物足りない。「塩湖」だと湿った感じがする。同じ意味だけれど、鹹湖というと、塩が表層にぴんと固まっていて、水がたまっていない、そんな感触。僕は一度だけインドにいってこの光景をみた

ことがある。鹹湖、塩湖というのは、大陸にはだいたい何か所かあるもので、インドのデカン高原の近くにあります。ずっと真っ白くて、乾季だとその上を人間が歩ける。雨季になるとその上に水がたまっちゃうので、歩けませんけど。「候鳥」、こう書いて昔は「わたりどり」と言った。作者の意図としてはこう書きたかったんだね。真っ白い風景を、生き物の影とてなにもないところ、候鳥が渡っていった。原初的風景で、太古からこの風景は繰り返してきただろうと思いますね。そんな原初的なところをとらえて表現している。どうして富沢赤黄男がこの時代にこういう句を作れたかなと思うんですね。もう一句。

蝶墜ちて大音響の結氷期

これもわからない句の代表句のように言われていますけれども、僕はぱっとある感触でわかった。僕は中学二年のときに、中学生の現代詩のコンクールに、先生がだまって、僕が宿題で出したのを出したところが、静岡県で特選になった。これが僕の最初の文学的なきっかけでね。ですから俳句は田川飛旅子先生なんですがそれは25歳の頃で、十代の頃は現代詩だとかそんなのを、いなかのちょっとぐれた文学少年みたいな感じで読んでいたものですからね。わりとぱっとわかる。この富沢赤黄男句はちょっと違うでしょう？詩性が、ポエジーが強い。そして素材の捉え方、表現も含めてかなり違う。それまでの俳句と、俳句の通念とも違う。富沢赤黄男さんは30代の頃だったか、中国大陸に兵士として行っているんですね。中国のかなり奥地の方に行って、その時に、自分のランプを、日本に家族と一緒に残してきた娘の潤子さんに例えて、ランプが潤子のようだ、灯っているのが、自分の心を温めてくれる。そのような作品があって、その後に「蝶墜ちて」の句がつながっていると思います。皆さん諏訪湖の「御神渡り」って知ってますか？氷が諏訪湖に張るとバリバリと氷の圧力で雷が鳴るような大音響をたてて、湖の真ん中あたりが盛り上がる、神様がそこを渡ってくると言って、「御神渡り」という、季語にもなってますよね。ところが温暖化で御神渡りしてくれない、湖に亀裂が走らなくなっちゃった。大陸型気候というのは、僕も行って何度か経験したことがあるんだけど、日中気温25度、30度に近くても、夜にはどかっと零下に落ちる。季節の変わり目の来かたが違う。日本の季節感は大変やさしい。春と秋が長いでしょう？春はやわやわやわとあったかくなる。秋はやわやわやわと寒くなってきて、冬へとやさしく季節が移っていく。ところが大陸はそうじゃないんだね。そのことにある時僕は気付いた。お昼までは蝶がひらひら舞う陽気、それがどかんと、一日で急変して真冬になっちゃう。ロシアとかウクライナの人はそれを経験してるはずなんだね。モンゴルなんかもそうだね。春と秋が短い。とにかく、冬から夏へ、夏から冬へと、二季に近いぐらいと言っちゃうと極論にすぎますけれども、春秋が長く続いてくれないということでありましょう。そんなことで、ある日突然に大音響とともに氷が張る、そして蝶が落ちる。それを二物衝撃で詩的に表現している。山口誓子が「二物衝撃」をどこから得たのかなと。芭蕉の時代からとりあわせとか、配合ということは言われていて、そのことについては何も珍しいことではないと思いますけれども、山口誓子は「二物衝撃」と、「衝撃」とまで言っている。まさにこの句は「二物衝撃」。激しいです。皆さんご存じのように山口誓子の作品に「夏草に汽缶車の車輪来て止まる」、これも激しいでしょう。一見写生のようだけどそうじゃない。汽缶車の車輪と草とを、二物衝撃でぶつけているわけですね。一見写生のように見えるけど、そうじゃない。二物衝撃で計算して作っていると思います。先ほども言いました、高屋窓秋も大変面白い。

荒地にて石も死人も風発す

荒涼とした風景のなかで、戦争のことも含めて、こんな気配はあろうかなと。なにか風が吹いてくる。石も人間の死体も、そこから風を発しているようだと、荒涼とした風景を造形していると思うと、大変やさしい。

山鳩よみればまはりに雪がふる

これはかなり写生的な句に近いかなと思います。山鳩が鳴いている。そしてはらはらと雪が降ってきている。抒情的な景色というのかな、しかし中七の表現が現代詩的で新しい、そのように理解しております。

渡辺白泉、この人もまったく特異な視野でもって作っている人です。例えば僕が好きなのは。

湧く風よ山羊のメケメケ蚊のドドンパ

面白い句だよね。ちゃんと季語が入っている。ちょうどこの時期にドドンパが流行ったことがありましたね。テレビでドドンパを歌ってる若い歌手を見てると、若い細っこい子が、なんだかくねくねと、歌いながら。それを少し皮肉ってる。面白いこと言ったなと思いますね。皆さん一番よく知っている句はこれでしょう。

戦争が廊下の奥に立つてゐた

これは多くの俳人にとって、この当時難しかったはずなんですよ。どうして戦争が廊下の奥にいるんだと。でも今ではごく当たり前のことで。なんとなくわかればいいわけで。戦争というものはひっそりと、あるところに立っている。ノーベル賞取った作家だったかな、「戦争は女の顔をしていない」という暗示的なタイトルを使っている。この句もそうだと思います。まさに今、我々はうっかりすると、戦争が廊下の奥に立っていはしないかなと。相当警戒する時代背景、今日的ですね。そう思いませんか？

そんなことで、ちょうど一時間であります。先輩の作品を尊重しながら、そこから得るもの、今も僕は新しいと思います。現代俳句協会は、若い人たちが新興俳句を大変よく勉強している。ありがたいことでもあるし、いいことでもある。僕が若いころ惹かれたように、彼ら、彼女らが惹かれているのだろうなと思いました。ご清聴ありがとうございました。

（テープ起こし　山戸　則江）

堀田季何氏の全句講評講座

なつはづき　報告

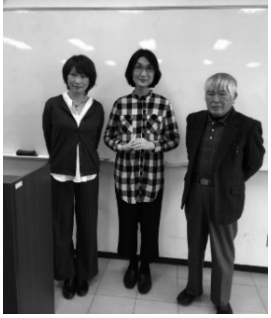
令和五年一月九日（祭）、横浜市健康福祉センターにて、全句講評講座が開催された。応募者二十五名。一人二句を事前に投句し、当日は全句に対して講評が行われる、という講座である。神奈川では以前にも池田澄子講師をお招きして全句講評の講座を開いたことがある。他府県に比べ、全句講評講座に関しては寛容な地区である。それはひとえに会員が「いろいろな人から学ぼう」という勉強熱心な気持ちの表れであろう。

さて、今回の講師は堀田季何氏。第三句集『人類の午後』で第七七回現代俳句協会賞を受賞し、同作品で二〇二一年度芸術選奨文部科学大臣新人賞も受賞している。俳句以外でも短歌や詩歌に精通し、国内、海外を問わず活躍をしている新進気鋭の作家である。もしかしたら気難しい人ではないか、と参加者は少し緊張していたようである。しかし会場に現れた堀田講師は柔らかい物腰、講座が始まると話し方も穏やかでユーモアもあり、いつしか一同話に引き込まれていった。

堀田氏の話の中で特に印象的だったのが「問題がある句は情報が多いのではなく情報が足りないのだ」という言葉。初学の頃「詰め込みすぎ」と指摘された事も多々あり、なるべく「削る」事を念頭に作句をしてきた。だがそれは知らず知らずに自分だけが納得して他の人をなおざりにしている、という弊害を生んだのだろう。現代俳句協会の研修部の添削を担当している堀田氏の言葉だからこそ重みがある。

所定の時間きっかりに話をまとめ上げる話術はさすがだ。二時間半の講座はあっという間に終わってしまった。充実したひとときであった。

堀田季何氏



尾崎会長・堀田季何氏・なつはづき氏

新会員紹介欄

寒昴　河野眞砂子（無所属）

寒昴吾に答ふる電波あり
着ぶくれてどこが前やら背中やら
探梅と言ひて帰らぬあの二人

白椿　金子　堯子（麦）

山眠る蝸牛も熊も包み込み
湯ざめして方程式の解を知る
白椿豚の鼻先押し返す

【会員新刊紹介】

『絆』（鷗座創刊二十周年　鷗座合同句集３）より

大山　賢太

「浮かれ猫」

お稲荷さん大き猫住み月朧
浮かれ猫猫撫で声で呼んでいる
一山を薄紅に染め諸葛菜
どら猫が上手に開けた春障子
台風の波波波の相模灘
たまちゃんやこっちにおいでねこじゃらし

諸家近詠

（到着順）

秋晴れ　斎藤佳代子（山河）

文化の日未読の本のほこりやけ
息白し楽園知らぬイブの裔
秋晴れがどこまで行ってもついて来る
夜の秋入眠剤のうすピンク

野紺菊　田村　道子（岳）

いくつもの河を渡りぬ蜃気楼
ゆんたくの長寿自慢や島らつきやう
見えぬものいつも手探り流星群
野紺菊あり泣き虫の母と在り

御神体　佃　悦夫（海原）

夏木立御神体が遊びおる
人形と青葦ともにしびれけむ
新緑を映す赤ん坊神の域
新緑や鱗が生えた寝覚めとも

初浅間　塚田佳都子（好日・草樹）

魂に大小はなく初浅間
御節盛る赤絵の皿も馳走なり
自転する星や雪兎耳立てる
落葉松の霧氷一期の夢ならむ

凍鶴　舘林　史蝶（海原）

凍鶴の我子に諭されマスクする
柚子ひとつ地雷の如く嬰の手に
鉄錆に太陽とどかぬ冬深し
骨壺に入りきれぬ父冬銀河

駅ピアノ　筒井　尚子（顔）

冬蝶やどこへゆこうとケセラセラ
達観を手にした瞳寒昴
清廉潔白すっくと佇ちし大寒木
初春のモノローグなり駅ピアノ

ものの種　山老　成子（山河）

あいまいな鴉の序列春立ちぬ
名ばかりの春へ零れてものの種
身の常に変身願望スイトピー
パソコンの反乱やつぱり亀鳴けり

絶対値　田畑ヒロ子（顔）

大根一本俎占める絶対値
鉋屑陽を巻き込んで日脚伸ぶ
ガンジーになる途中なり干し大根
躓いて吾を見直す寒の入り

馬上の雛　たむら　葉（炎環）

如月の公園日だまりの商談
葬儀なき火葬よ綿虫のふはり
舌のよく回るＤＪ日脚伸ぶ
百年の民家馬上の土の雛

―然―　田尻　睦子（無所属）

割り箸ノ漂流ハジマル　初山河
大寒ノ　大黒柱ノ　亀裂カナ
きその死を　ひろびろひろぐ　雪明り
てにうけて　かのよへもどす　はなの舟

癸卯　田崎比呂古（無所属）

遅れたる寒中見舞の余白かな
冬晴れやマスク外して歩きけり
消息を尋ぬる電話柊挿す
寒しじみ看取り介護の契約す

寒明け　田中　治夢（山一東京句会）

誦経を聞く大寒のさるすべり
寒明けや照り返す川海めざす
逆鉾のしづくの撥ねや建国日
次の代（よ）の声す園児ら春立てり

白　つつみ眞乃（無所属）

清明の詩賦そらんじる白き梅
息殺し白き牡丹を白と言ふ
白い闇冷い正気が吾を撃つ
幻の白鯨見しや沙羅の花

冬の啄木鳥　立石　采佳（詩あきんど）

無花果羊羹まだ使へます黒電話
時雨忌や枯野の花をさがしゆく
冬の啄木鳥会話中です男です
書き出しは「いつのまにかに」と言ひ分けす

月朧　土岐　詳恵（陸）

月朧赤きテントの曲技団
春の夜やゆびの影絵のこんこんと
いつからか朽船消えぬ春日影
春ともし小津の常宿茅ヶ崎館

エンドロール　つはこ江津（つぐみ）

牡蠣するっとたぶん明日もあるだろう
そのむかしふるさとを発ち冬銀河
身のうちにひとつのうたを鯨来る
エンドロールのつづきのように春の川

城の哀史　日置　正次（玄鳥）

衣笠の城の哀史や柿若葉
噴水や遠き日のこと軽からず
古書店に掘り出し物や大西日
ぶらんこを降りて家出をピリオドに

俳人交遊録　第十二回

遅咲きの桜　渡辺　正剛　記

俳句を始める切っ掛けとなったのは、本当に若い頃だった。職場の先輩に勧められ、月一回の俳句会に参加した。「旅と俳句」の田辺正人先生が指導に当たられた。続いて、「風」の沢木欣一先生の指導を受けた。昭和四十五年日航山中寮一泊吟行が開催され、沢木先生ひとりが夕暮るるまで散策されていた。

赤富士の胸乳ゆたかに麦の秋　沢木　欣一

の句を寄せられ、見る目が違うなとびっくりしたものである。ご夫人の細見綾子先生にも時折、指導を仰いだ。綾子先生には次の有名な句があった。

女身仏に春剥落のつづきをり　細見　綾子

夫婦でも俳句は違うものだと思った。観察の違いをまざまざと学んだ。

武蔵小金井の沢木先生宅に遊んだのも良き想い出となっている。

定年後はこれまでの俳句に磨きを掛けてみる気になった。近くの公民館の句会に参加し、大城まさ子先生に学んだ。先生の勧めで現代俳句協会に入会し、又、「波」にも参加するようになった。「波」主催の倉橋羊村先生とは、熊本の天草吟行がご馳走三昧の良き想い出となって、今なお記憶に生々しい。

枇杷熟るる一揆の島の教会堂　渡辺　正剛

倉橋羊村先生には、生れ故郷の近くにある田原坂の句が印象に残っている。

無念でごわす田原坂寒かと　倉橋　羊村

神奈川現俳の地区地区の俳句会に参加し、司会などを経験することにより、選句に自信を持つようになり、遅まきながら、俳句に目覚めたものである。

サミット短信（研究会・ブロック句会報）

西部俳句研究会

伊藤　梢　報

於・明治市民センター
令和４年11月26日

第二九四回

風呂吹や「まあ待て」と口尖らせる　安藤　靖
柊の花咲く小径ひと気なし　生田　暁美
灯台の孤独へ釣瓶落としかな　石鎚　優
鉈で割り煮つけて甘い南瓜かな　占部美土子
雪雲の間の日差し背に届き　奥村　純子
銃口へ不戦のＨＡＩＫＵ虎落笛　金栗トモ子
木の葉時雨輪廻転生の中を行く　佐々木重満
まんざらでもない仲蛇穴に入る　塚田佳都子
シャガールの涙ほつほつ冬銀河　内藤ちよみ
生かされて生きる晩年石蕗の花　長島喜代子
強風に翻弄される猫じゃらし　野口美穂子
てっちりや舌に転がる周防灘　長谷川昭放
肩たたく落葉拾ひて栞とす　廣田　洋一
シベリアを何処から食べよか返り花　藤方さくら
返り花いま談笑に加はらず　星　由江
「旅割」の秋を愉しむ旅がらす　柳　蒼柳
石榴割る今更好きと言えないよ　渡辺　正剛
日向ぼこアップデートができればなー　伊藤　梢

第二九五回　令和５年１月28日

春を待つハミングをしてカンツォーネ　安藤　靖
新春の酒にほどよき安堵かな　生田　暁美
切断のビーナスの手や春浅し　石鎚　優
冬ざれの街の明かりが吸いよせる　岩田　信
天心へ吸い込まれそう冬の青　占部美土子
生命を奥に秘めたる樹氷かな　岡田　良子
洗いもの俺がやるよと凍てし夜　奥村　純子
今の世に反り合わなくて冬眠す　金栗トモ子
海光に見え隠れする春隣　佐々木重満
海鼠よりさびしい日暮れありにけり　塚田佳都子
おもってますよにんじんは赤面す　土岐　詳恵
手のひらの冷たさ絵筆遊ばせる　長島喜代子
今年こそ再会果たさむ新暦　中村まさえ
蝋梅の香に包まるる古刹かな　野口美穂子
息災や言の葉ひかる七種粥　平山　圭子
寒の水五臓六腑の目覚めけり　廣田　洋一
十年に一度の寒波抱いて寝る　藤方さくら
町中へ自我消すための冬帽子　星　由江
露地ゆくや素心蝋梅ぬっと吹く　柳　蒼柳
定年は疾うの昔かちゃんちゃんこ　渡辺　正剛
梟は檻空間を考える　伊藤　梢

横浜俳句研究会

菅原　若水　報

於　横浜市社会福祉センター
令和４年12月９日

第三九四回

三丁目鯛焼割れば冬夕焼　石川　夏山
焼餅も焼けない齢かまど猫　金栗トモ子
接種後の十五分待ち冬すみれ　里見　美季
霊魂はなぜ西めざす冬夕焼　菅原　若水
焼きもちで膨るセーター手で隠す　内藤ちよみ
餅を焼くジェラシーにある裏表　芳賀　陽子
四回転ジャンプ氷だって焼ける　早坂　澄子
虐待も知らず園児の日向ぼこ　藤方さくら
カーナビの目的地なり冬銀河　宮永　武彦
シナモンの香や焼林檎口いっぱい　吉村　元明
不安になる夕焼十二月のメンタル　若林つる子

第三九五回　令和５年１月14日

賀状来る差出人は雪女　石川　夏山
寒晴れの幕開けを待つ樹々の黙　岩田　信
年賀状鳥獣戯画のうさぎ来る　金栗トモ子
けん玉のよく入る日や日脚伸ぶ　坂　守
寒稽古ほれぼれとする心技体　菅原　若水
第三の男も寡黙冬岬　内藤ちよみ
奈落より迫り出す黙や雪女郎　芳賀　陽子
葱を抜くすうっと「き」の一文字　早坂　澄子
息白しゴンドラ五分告ろうか　藤方さくら
出囃子や初席の袖賑々し　吉村　元明
五日の築地黙阿弥ついと角曲がる　若林つる子
猿廻し小ざるの銭をじっと見る　渡辺　正剛
連絡先　菅原若水
s-shinya@s6.dion.ne.jp まで。
折り返し「句会へのお誘い」をお送りいたします。

横浜ブロック星川句会

なつはづき　報

令和４年12月５日

十二月

冬の蠅冬の踊も真青なる　石鎚　優
シベリアの冷たさもちて鳥の白　江原　文
追伸の余生ふわふわ草紅葉　金栗トモ子
酉の市叱られながらゆく子かな　桐山　芽ぐ
愛されて嫌われもした冬座敷　栗原嘉一郎
冬晴や迷ひ抱へて生きてみる　菅原　若水
冬耕を望めば見ゆる少年期　徳丸　昭広
短日の石と思えば骨片　内藤ちよみ
ここまで生きたら野兎になりたい　長島喜代子
クリスマス笑ってゐないちひろの子　渡辺　順子

一月　令和５年１月９日

冬草の青を踏まずに近づきぬ　麻生　明
初明り棟方志功素っ裸　石鎚　優
幼子も会話の中に焼林檎　大塚　真紀
冬座敷呼吸音だけ聞こえけり　金栗トモ子
願いましては雪がちらちら降って来し　桐山　芽ぐ
小走りに信号渡る老いの冬　栗原嘉一郎
厳寒やもう毛穴まで閉ぢてゐる　菅原　若水
絵を描く象の曲芸クリスマス　徳丸　昭広
北斎の熱き青春龍の玉　内藤ちよみ
青き日の壁の傷痕滑明り　町野　敦子
人日の雑音ばかり拾ふ耳　渡辺　順子

西部ブロック丹沢句会

長谷川昭放　報

十一月句会　順不同・西公民館

七五三の祢宜の靴音神の音　田畑ヒロ子
落丁のごとき一にち日向ぼこ　岡本　保
家々に落花生干す町に来て　飯田美枝子
百選の水の盆地へ落葉降る　尾崎　竹詩
おびを解きもみじの川をさかのぼる　與　起
あきあかねきからうつろひてきからあき　羽田　勝二
冬入日遠近法の彼方かな　加藤　三眠
赤のままみんなで酔えばこわくない　北村　文江
枯葉道影なき影に擦れ違ふ　菅沼とき子
人形と青葦ともに痺れけむ　佃　悦夫
反抗の白紙答案一位の実　佐々木重満
文豪か文士気取りか懐手　長谷川昭放

十二月句会　順不同・西公民館

平和落胆喘ぐ日々師走かな　立石　采佳
燃え尽きて枯烏瓜の憔悴　加藤かほる
化石展　木の葉時雨の上野かな　佐々木重満
かねのねにかわもにゆれるかものむれ　羽田　勝二
マニュアルに添はぬ足取り雪女　北村　文江
マイナスになれぬ零戦十二月　竹村　半掃
反抗期知らずに育ち返り花　岡本　保
骨董屋きちんと冬が待っている　尾崎　竹詩
あおあおと銀河本流鷲掴み　佃　悦夫
町の音静めて霜の夜となりぬ　田畑ヒロ子
砂像の城壊れてなんぼ赤とんぼ　いけ　まり
上野駅新巻いっぽんぶら下げて　與　起
公園のイルミネーションみな聖樹　飯田美枝子
セーターの傷みしところ失恋期　内藤ちよみ
戒名は呆け俳人か凡夫人　二上　貴夫
冬の風鈴乾きし音のぶら下がる　芳賀　陽子
深夜二時命を燃やすシクラメン　加藤　三眠
冬紅葉あかるく老いるは大仕事　長谷川昭放

一月句会　順不同・堀川公民館

おでん鍋なついいつきに叱られる　尾崎　竹詩
水餅や産土夢も樽の底　佐々木重満
顔洗う銀河の一滴入れてけり　佃　悦夫
餅の罅ト占のごと走り入る　菅沼とき子
着膨れて夜郎自大の国にゐる　二上　貴夫
戦前の匂ひする世や雪催　岡本　保
蓮根の豊作の年戦かな　飯田美枝子
野兎に逃げられ民話本白紙　内藤ちよみ
水鳥や氷の層の沓の音　加藤　三眠
単線へ寒月の黙引いてゆく　芳賀　陽子
陶窯にポッと火ともす冬の朝　羽田　勝二
雪女郎・暖冬泥濘（ぬかるみ）・死亡説　竹村　半掃
血に染まる七里が浜の冬将軍　北村　文江
コンビニの灯り冬田の暮れてゆく　加藤かほる
冬虹のしきりにこぼす　針の沓　與　起
蠟梅の香のする影を踏みにけり　田畑ヒロ子
幾たびも月を砕きて冬波頭　澁谷　徹
その昔ジキルとハイド寒月光　長谷川昭放

◎連絡先：芳賀陽子事務局長まで

川崎ブロック

山田ひかる　報

於・川崎市総合自治会館
12月17日（土）

十二月句会

マスクして笑顔の見えぬ顔ばかり　青島　哲夫
霜柱踏むに先客ありにけり　麻生　明
虎落笛昔ばなしは怖かった　加賀田せん翠
ユーミンの曲の流るる冬至かな　坂　守
商ひはいのちの遣り取り年の市　菅原　若水
生ハムを咲かせ二人のクリスマス　関戸　信治
海鳴りが刺さったままの冬木立　西田みつを
コロッケを売る手に火傷年の暮　花澤ちいこ
ポップコーン手に煤逃の映画館　三沢　容一
六曲一双屏風にしたき藪椿　吉居　珪子
包丁のとまる海鼠の曲線美　山田ひかる

一月句会　1月21日（土）

寒鯉の黒の集団やくざめく　青島　哲夫
一人居に刺客のごとく寒波来る　麻生　明
寒の水噛んで逆らうことはせず　加賀田せん翠
初歩き三歩うしろに亡（つま）夫がいる　川島由美子
ままごとのこたつに呼ばれ客となる　坂　守
初鏡胸張り口角上げてみる　佐藤　廣枝
やさしさは怖ろしきもの雪達磨　菅原　若水
うたた寝の炬燵「剣客は商売なり」　関戸　信治
金輪際嘘はつくまい水仙花　ダイゴ鉄哉
パリーへと春着の客室乗務員　花澤ちいこ
冬眠のなき人類に睡眠薬　三沢　容一
初釜や正客辞退出来ぬ歳　吉居　珪子
女正月午後も背中で聞くラジオ　山田ひかる

湘南ブロック

堀口みゆき　報

藤沢市民活動推進センター二階会議室
12月2日（金）

第85回サンシャイン句会

久闊を叙して初冬の黒揚羽　石鎚　優
湖近きメタセコイアの枯れ高し　荻野　樹美
自分とは何者なのか虎落笛　菅原　若水
首塚やふあふあつつむ冬芒　芳賀　陽子
まつ先に陽当たる家や吊し柿　馬来まち子
命宿る水の星へと木の葉散る　宮永　武彦
柿たわわ園児の列とすれ違ふ　山口　愛子
捨てマスク鼻のかたちが暮れ残る　山下　遊児
藁塚にもぐれば詩心湧きにけり　渡辺　正剛
鬼の子の滅ぶ形や風の中　堀口みゆき

第86回サンシャイン句会　1月6日（金）

風吹いて一志生れし冬紅葉　安藤　靖
ブルドッグ連れし婆さまや冬薔薇　石鎚　優

豚まんで済ます昼食寒の入り　荻野　樹美
鼻歌はビバノンロック柚子湯かな　菅原　若水
鳥獣戯画の兎とび出す年新た　田畑ヒロ子
結論を先送りして熊穴へ　芳賀　陽子
大吉のみくじににんまり初御空　馬来まち子
しあわせの一番上の干蒲団　山口　愛子
早送り出来ぬ余生や葱刻む　山下　遊児
冬の青心底過去が多すぎる　渡辺　正剛
ぽつくりと逝きたし冬の銀河濃し　堀口みゆき

一月から第一金曜の13時からに時間を変更。

◎連絡先　堀口みゆき miyuhoriguchi@yahoo.co.jp

夏雲句会（インターネット句会）

宮永　武彦　報

十一月

白鶺鴒きれいな時間とんできた　平田　薫
指笛や鳥が枯野を整へる　江原　文
雪が降るすべてなかつたことにする　菅原　若水
ハロウィンの魔女と乗り込む観覧車　堀口みゆき
金継ぎの夫婦茶碗の葛湯吹く　矢口　椛子
霧はれてもとのところに海の町　麻生　明
経文を唱えるように木の葉散る　佐々木重満
たこ焼きをくるくるくるくる日短か　桐山　芽ぐ
幹二つわかるる端を冬銀河　佐野典比古
梨を剥く尾を振る犬が目の端に　斉藤　祐子
稲の穂を残し通学路しずか　町野　敦子
冬銀河やがてなくなるわたしたち　石川　夏山
冬満月すこし正気過ぎませんか　田中　治夢
楓紅葉うすれし五感甦る　渡辺　順子
霜晴れや山河に還ろいつ帰ろ　吉村　元明
静かなるダム湖激しき冬紅葉　多久島重宏
渓流や君の内なる冬紅葉　石鎚　優
灯をともす逢魔が時に隙間風　須藤　節子
大地にも空にも千の冬紅葉　宮永　武彦

十二月

化石展　外はヒト科に降る落葉　佐々木重満
大根引く穴にほこほこ日が溜まり　佐野典比古
柚子七つ浮きて星座を結びをり　多久島重宏
ドミソミド垂氷払ひし今朝の奏　吉村　元明
晩年の広さとおもう大枯野　麻生　明
でも先生僕は落葉をつかまえる　平田　薫
長考の一手炭火を追加する　町野　敦子
聖夜には錨をあげよ摩天楼　江原　文
ジンルイは己を知らず寒北斗　石川　夏山
除夜の鐘自己否定感打ち砕く　須藤　節子
冬うらら人は時空を超えられる　菅原　若水
赤レンガスケート場の発光す　斉藤　祐子
極月の真青（まさお）な髪に逢ふテラス　石鎚　優
顔あげて浮いてゐるのみ鴨のとき　田中　治夢
冬灯シャンソン歌手の綺羅々服　堀口みゆき
煤逃げや夜はカレーと決めてある　渡辺　順子
横断の白線塗るや年用意　桐山　芽ぐ
ミサイル着弾す寒卵叩き割る　矢口　椛子
凶弾や質問権へ冬うらら　本田　詠遊
冬ざるる甲羅のような街の木々　宮永　武彦

一月

初凪の水平線と酌み交わす　石鎚　優
切り株の息吹くちから春隣　江原　文
ゆきをんな送信履歴突如消ゆ　堀口みゆき
連結器外し大寒の操車場　佐野典比古
水仙の香りを畳む茶の帛紗　町野　敦子
ふと思うことあり鶺鴒冬をひき返す　平田　薫
勤労感謝の日組合が死んだ　菅原　若水
蒸し上がる温泉まんじゅうしずり雪　桐山　芽ぐ
この星は干戈（かんか）不滅か去年今年　佐々木重満
風鳴るや魚も眠る氷橋　夏陽きらら
万人に好かれる恐怖シクラメン　長谷川昭放
冬ざれや放物線の終着点　石川　夏山
年賀状あまた跳ね入るうさぎたち　多久島重宏
淑気はる竹林透かしさす朝日　田中　治夢
実朝忌政子も哀し人の母　須藤　節子
初声やビニール越しの東天紅　渡辺　順子
初乗りの老人パスにある期限　麻生　明
カーナビの目的地なり冬銀河　宮永　武彦

◎連絡先　宮永まで。takehikom0410@gmail.com

横浜南部句会

尾澤　慧璃　報

於横浜市社会教育コーナー
令和5年1月25日

七草でない草混じるお粥かな　池田恵美子
宮城弁のラジオ体操寒卵　坂　守
句敵の草書で来たる年賀状　尾澤　慧璃
冬青空藤棚の影伸びにけり　長濱　藤樹
沈黙のハンマーヘッド寒波来　鹿又　英一
大寒の丸めし背中始発駅　村上　裕也
冬萌やちよつと寄りたくなる小店　川野ちくさ

金八ＺＯＯＭ句会

杉　美春　報

一月

皇帝ダリア関東の空澄み渡り　中村　光男
屠蘇酒酌み忽ち遊ぶ華胥の国　扇　義人
折詰の寿司のきゆうくつ初句会　杉　美春
雪催い安部公房のような地図　なつはづき
観覧車ひとこま毎の冬の空　佐藤　久
初空の糸手繰りたる父娘かな　村上　裕也
仏蘭西のシャボンおろして初湯かな　里見　美季
「夜の梅」分けて包丁始とす　松浦　泰子
おが屑を飛び出す海老や大晦日　尾澤　慧璃

◎連絡先　杉美晴　miharusugi@jcom.home.ne.jp

【新しい風】　神奈川の若手俳人

（第六回）　友定　洸太

エリカ

春きざす画集の上のヘッドフォン
のどかさやちりちりと引くテープのり
地に休むバレンタインの日の土鳩
鳥の巣に録音技師の寄っていく
下萌や掴んで運ぶ三輪車
象を見てきた日のジャノメエリカかな
止めるまで止まらずしゃぼん玉の銃
テイクイットイージーすよと桜人
古いメールの自分が元気シクラメン
また見たくなる絵と思う鳥曇

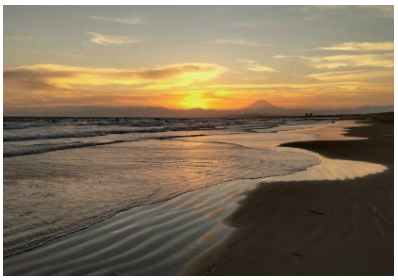
横浜市青葉区に児童野外センターこどもの社という施設がある。平日は主に近隣の保育園のお泊り会などのために貸し出されているが、予約のない土日は一般に開放される。三歳になる子がここの跳び箱を気に入り、まだ跳べないが来るたびに跳ぶ真似をしている。二台並べて置かれているので、少し上の子が練習する様子を横で見ることもできる。さっきまでは跳べなかった子が急にコツをつかんで軽々跳べるようになるのが面白い。そのときは僕も快哉をあげ、三歳児と一緒に拍手する。よその子にいきなり声をかけたりはしないが、跳び箱の周りに自然と生まれた連帯感は心地いい。人と人が関わりを結ぼうとするとき、同じものを見ていることが重要だ。俳句もまた、その非常に魅力的なものの一つだと感じている。

友定洸太　プロフィール

一九九〇年、横浜市生まれ。長嶋有主宰の句会で作句開始。「傍点」同人。全国俳誌協会第四回新人賞鴇田智哉奨励賞受賞。横浜市青葉区在住。

春の一句

地中海に眠る木馬や黄水仙　猪狩　鳳保
待つ人の椅子に花散るばかりなり　安藤　靖
煙突のパイプの煙山笑ふ　加藤　三眠
一生にひとつの買ひ物春彼岸　青島　哲夫
ゆきゆきて桜の精になるひとり　中山　妙子
こどもの日楽譜にみんな羽が生え　日置　正次
江ノ島や水平線の先は春　宮永　武彦



湘南の海（撮影：宮永武彦）

小坊主の大きな薬缶甘茶注ぎ　大山　賢太
ビーナスの切断の手や春浅し　石鎚　優
さくらどき銀行員の三時かな　藤方さくら
啓蟄のそれぞれにある胸算用　町野　敦子
木の芽吹く瞬きほどの息をして　八木　和子
揚げ雲雀密談は空の彼方で　金栗トモ子
始まりは誰にでも来る草若葉　堀場　信久
通販が駆ける大陸霾れる　堀場美知子
ジュピターの朱く潤みて猫の恋　関根　洋子
薄氷の光はじけて野辺に散る　内田ゆり子

＝地区動向・消息＝

1．1月9日（月）堀田季何先生による全句講評講座　25名参加
2．1月11日（水）会計監査　7名参加
3．1月16日（月）部長会議開催　16名参加
4．1月16日（月）拡大幹事会　27名参加
5．新会員紹介
麻生　美穂　川崎市宮前区
高田　祥聖　相模原市緑区
6．新会友紹介
安藤久美子　茅ヶ崎市
宮永　武彦　茅ヶ崎市
杉本　弼　秦野市
岡田　良子　藤沢市
三橋　伸子　秦野市
7．会員動静
阿部　喬　東京都中央区へ転出
山本　隆之　千葉県へ転出
8．逝去謹悼
上田　久幸　川崎市川崎区（令和4年6月17日）

《編集後記》

◎今号は、「創立四十周年記念大会」の中村和弘会長の講演録を掲載しました。中村会長、テープ起こしの山戸則江さん、ありがとうございました。
◎サミット各句会の報告は紙面の都合で一月分まで掲載しました。二月分は次号掲載しますので、ご了承ください。
◎会報160号では、「夏の一句」を募集します。編集人までご投句ください。5月20日締切です。

発行所　神奈川県現代俳句協会
発行人　尾崎　竹詩
編集人　杉　美春
〒252-0325
相模原市南区新磯野4-4-1-506
電話・FAX　046(252)2729
Eメール miharusugi@jcom.home.ne.jp
印刷所　㈲湘南グッド